

21/3/7 特別史跡名古屋城跡 本丸内堀発掘調査の概要 説明部分
(名古屋市民オンブズマンによる、半自動文字起こしアプリによる文字起こし)

木村有作学芸員：皆さんおはようございます（おはようございます）

本日はですね、この前報道等でですね、ご紹介させていただきましたように、ただいま今年度ですね2020年度実施しております。本丸内堀と呼んでおりますけど、この空堀のですね、発掘調査についての、まあ成果発表といいますか、市民の皆さんに何が今回わかったか、あるいは何のためにまず調査したか、そして何がわかったかということをご紹介するためにこの時間を設けさせていただきました。

私名古屋城調査研究センターの学芸員で木村有作と申します。

今日はですね、今下でスタンバっております大西学芸員、調査員とともにですね。

今回皆さんのこの成果をご紹介していきたいと思っております。

皆さん先ほども言いましたけどこちらのですね資料まだ持って見えない方はぜひ前に私の前にございますので取りに来てください。

それではこのパネルをご覧くださいになってくださった方ももうおみえだと思っておりますけれども、今回のこのといいますか、この今やっております内堀の調査。

ここにドーンとそびえ立っております大天守台（だいてんしゅだい）ですね。

大天守台（おおてんしゅだい）言い方いろいろありますけども、この天守台の石垣、それからこれそれをまたぐるっとこちらを取り囲みますね、あまり普段我々が気にしないようなことが多いですけども、御深井丸あるいは西の丸側の石垣。

こう言った石垣が、の下の地下の状態ですね。

今上の状態がどうなのか我々見ることはできるんですけども、なかなか地下の状態を診断することができない。なかなか医者にもかかれないというのは現在の名古屋城だったんですけども、今回それですね、それはもう2017年度から今回3回目の発掘調査をしている訳なんですけど、その間に実は昨年度、ここにもありますように、ここをですね、まず掘る前に、地中レーダーといまして、我々の病気でいうエコーみたいなそれをですね、ここ全体をかけていきました。

それで地下の何メートルかどうかっていうのをちょっと切りまして、それでですね状態を見ていくと、結構反応が出てきました。これがですね、一体古いものなのかあるいはこういう工事をした時にですね、掘ったままいろいろ殻を詰めてるのかなという、攪乱と呼んでおりますけれども。そういったものなのか、それがわかんないですね。

ということで一応確認したいということでそこにトレンチを入れて、こういう調査をしていたわけなんです。あくまで石垣とそして内堀にもですね、何か遺構が見つかる、古いものが見つかるかどうか。というのはですね、実は名古屋城史という古い本、城戸久さんってこの設計をされた先生が書かれてるところにですね、ちょっとそういう内堀になんかあるんだということが1行位書かれておまして、みんなそれだけは知ってたんですけども、中々それを大々的に言うことできなかったんですけども、今回それも含めてちょっと調べる

ことにしたらですね、

このレーダー自体は1.2メートル位のところでやったんですが、実はここからですね覗いていただくと、今大西さんが立ってる所が今の地表ですけども。

そこからですね順番にその地表がですね、現在、そしてここは戦災を受けています。

戦争のときにですね、もうかなりガラガラガラと兎に角材木が落ちてきて、もうこの多分この裾のところは全部そういう木材で埋まったと思います。そこで燃えるんですね。燃えて燃えながらその時にひびがいっぱい入るんですけども、燃え殻が下たまります。で大きな殻なんかをですね、引き揚げたんですけども、残りはガラガラとした細かいものは底に残ってしまいますので、それを底全体に引き均しています。

そういう状況がですね、やっぱり掘っていくとわかって、戦災殻というか、戦災層という地層がありまして、その下によく戦争前の旧の堀底が出てきます。

今どの辺ですかね、中間位ですかね、旧の堀底は。今もそうですね、先ちょい辺りに戦災層とその下にあのちょっと遠くで見づらいですけども、あのぐらいだという感覚ですね。

でそれを更に掘っていきますと、まああの、明治から昭和初期の近代層があって、下の方にですね、そうすると掘っていくと割と混ざりけのないですね、あのもう瓦しか出てこない褐色の土が出てきます。それを我々はおそらく江戸時代に埋まった、近世に埋まった。

さらに言えばですね、この大きな修理をしてる有名なあの宝暦の大修理。

おそらくそのとき工事が終わった後、埋め戻してる土じゃないかなと、今までの調査で推測してきたんですけども、その土がありまして、今回もそれを掘っていくとですね、地上から90センチぐらいのところですね、いっぱい今見えてますけども礫、こぶし大ぐらいですね。拳大ぐらいの礫を中心にももちろん大きなものもあるんですけども、それが出てきました。それならばですね、今までも全く出てこなかったんじゃないかと、結構今回多いな、こういうレーダーが反応したのかなというふうに思ってたんですけども、そうしていくと今大西さんが示しているような所ですね、大きな石が頭を出してます。今ちょっと掘っちゃったので、全体が見えてますけども、最初はこのようにですね、頭だけ出てた、写真にありますように。それで見つけてですね、あれ、これは何か周りの石とちょっと状況違うなということで、それをちょっと探していくと、もう1石ありまして、それが同じように、北側にこう面を向けて並んでたということで、どうもこれは石列。ここでは石列と呼んでおきますけども。そういうなんか遺構がですね、石を使った遺構がここにあるんだというふうに分かることができた。その後全体ですね四つのトレンチを掘っていくとですね、北のこのXトレンチと、こちらはWなんですけど、ところですね、もう1回ちょっとまだ、一応ですね石のですね、手前をですね、その礫とかをちょっと退けてですね、部分的に退けて調べてみますと、もうすぐに石のところが消えましてそれから江戸時代と思われる土も、なくなりまして、ある程度しっかりした黒い土の中にいっぱい地山のブツブツが入ってるような、よく見るんですね。それは何かというとおそらく築城時の盛り土じゃないかと思ってるんですけども、そういうものが出てきて、どうもそれに掘り込んでこの石列を作られてるんじゃないか。最初はその、出てきたのは、江戸時代の盛り土の中なので、新しいものかなという予測もあったんですが、どうもその下のところを調べていく限りでは、それよりも古い築城時といい

ますか、この大天守台、大天守台の石垣と同じぐらいの時期、ちょっと時期のことは置いてきまして、その新しいものではないなあというところで掘り進めていったわけです。

で、そうするとですね、こちらのWの方のすいません、Xの方のところでもここなんかちょっと見にくいんで、そちらの方の方がひょっとすると、正面で見やすいかもしれませんけれども、かなり大きな石が出てますね、こちらはですね実は手前は新しい戦前位の攪乱です。掘られちゃっているんで、大きな穴があいています。幸いそれで石の全面まであったんで石が前面に出たんですが、それで見ると80センチぐらいの非常に大きな石があったということで、これはますます普通のちょっと遺構といいますか、石がただ置いてあるだけではなさそうということになりますね。で今の大西さんが示している大きなですね、水が引いてよくわかるかと思うんですが。

それでですね、それまで南北だけのトレンチで調べてたんですけども、この延長上でですね、この石列が延びていくのかどうか、特に石垣に向かって石垣とどういう関係があるかということですね、調べる必要が出てまいりましたので、これをですね、もちろんこの石列の正体もわからない状況でしたので、ということをやりました。同時にですね、南の方のトレンチでもですね、今度はですね、こちらはさっき北面に揃っているという言い方をした、北面がですね揃ってこういう石垣状をした。こんな傾斜を持っていたのかなというイメージだったんですけど、こちらは1列しかないですね。

それをひっくり返して南の方で、じゃあどうだったかといって、トレンチを開けてみしたら、やはり同じようにですね、そういう石列が出てきた。

ただし、その石列は今度は南側にですね、揃えて、この前はこちらは南側が石は長そうだったんですけど、今度は南側が石が長そうで、要するに何かなんていうんですかね、はっきり石垣と言えなかったんですけども、まあ石垣の特徴を持ったそういう並び方をしていたということで南にも同じようなものが、いうことで、これは何か構造物がですね、建物の基礎となるようなものの石垣関係の遺構じゃないかなって、疑い、考え方が推測が強まっていったということになります。で、そうですね。

そういうことで一応、今は残念ながらちょっと、今見れるところあれなんですけど、じゃあちょっとXトレンチで天守台との関係だけ説明を特におきたいと思うんですけども、えーとですね。

実はあそこにちょっと石がちらっと見える、ここだと見にくいので、後でここでまた見てもらえばいいんですけども、ちょっと飛び出た石があって、最初見たときはですね、これはひょっとしたらもう一段上に、積んだやつかなあと思ったんですが、よく見てみるとその下に入ってる土はおそらく宝暦といいますか、江戸時代の土だったので、これは要するに宝暦の時っていうか、実は他のトレンチも何本か掘っててもですね、宝暦のときに修理をする時にですね、前を少し掘ってですね、それから下を確かめてから積み直しをしています。なので、おそらくそういうところで動いちゃった石、おそらく状況からして石列関係の石じゃないかなと思うんですけども、そういったような、中々ですね、難しい状況もあったんですが、あの下に実はこう斜めにちょっと下がり気味で石垣に向かっている石はありますので、おそらくですね、ここの石、石垣とここの石垣と、この石列の関係は、あの大天守台に擦り付くよ

うに造っていく計画だったんじゃないかなあと言うふうに、今のあそこのトレンチでは、そういう見解を示している。ということで、あとはそれがなんだろうかということについてはこのですね、チラシとかっていうところで、あるいは新聞記事でいろいろご覧になってる方もいるかと思います。

ただ今言えるのはですね、こういった石垣の基礎みたいな一番下の方の特徴を備えた石列が南北に出ています。その間の距離はおよそ25メートル。

昔の距離でいうと13間とか12間とか13間。そのぐらいの数字になると思うんですけども、そういう石垣、石列が出てると、ということはですね。じゃあそれが直接こういったものに繋がるかという、まあそれについては、おそらく今の状況から見ると、計画があって、一番下ぐらいは造ったけども、その後はちょっとわからないといえますか、まあやめたというか計画変更があったというような、推測をするにとどまると思います。

だから、それがいきなりですね、バンと石垣があって、そこに小天守が聳えてたっていう想像まではちょっと至らなかったというようなところです。

ただこういった新しい、新しい発見があり、今までわからなかった名古屋城のこのなんてゆーか実態が少しでも今回、実は実は言うとなんか、名古屋城でですね、見えない石垣が初めて発見された、初めてなんです。よその城では結構ですね、埋没石垣っていっぱいあるんですけど、名古屋城では今回初めてだったので、我々もその辺り喜びとその逆に戸惑いというか、非常に慎重にこれは扱って、皆さんに伝えて後世にもやっぱりしっかりした記録を残していかなきゃいけないなというふうに思っているところでございます。

以上で簡単ではございますけれども、概要としての説明を終わらせていただきます。後まだ時間ございますので、個別にもしご質問があれば、ここで話させていたいただきたいと思いますので、皆さんと聞こえるようにお話をしていきたいと思います。1時間ぐらいあと、11時位までここでおりますので、また質問の方ありましたら、パネル等も近くで見てください、また、ご質問いただければと思います。

まずじゃあこれで1回目の説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。